2013年度「研究部会活動記録」

部会主任名	梅森直之	現代政治経済研究所
研究課題：東アジアの政治と思想：歴史的和解・民主化・アジア共同体の可能性		
月/日	活 動 記 録	
5/17	<p>場所：早稲田大学現代政治経済研究所会議室（早稲田大学早稲田キャンパス1号館2階）</p> <p>著者：橋本恭子（日本社会事業大学）</p> <p>評者：西川潤（早稲田大学名誉教授）</p> <p>報告タイトル：『『華麗島文学志』とその時代』著者との対話</p> <p>参加人数：22名</p> <p>活動報告：</p> <p>本書は、従来日本の比較文学者からは沈黙され、台湾の台湾文学者からは批判・誤解を受けて来た島田謹二のテキスト、『華麗島文学志』を比較文学研究史のなかに位置づけ、両者を架橋することを試みた研究である。序章および第一章—第七章からなる。著者は、第二章において島田の研究の流れを追いながら、『華麗島文学志』が、台湾人の文学を分離した在台日本人の文学史、すなわち外地文学史として位置づけられていった背景を明らかにした。第三章では、『華麗島文学志』を支えていた在台日本人の時代精神が、郷土化、戦争、南進化によって形作られていたことを整理し、第四章では、島田の外地文学論における「エグゾティズム」、「リアリズム」、「郷愁」の持つ含意を詳述し、島田が追求した「リアリズム」には宗主国人の文学であるがゆえの限界があったことを指摘している。以上を踏まえ、著者は『華麗島文学史』を、在台日本人による「台湾意識」に基づいた文学史であり、比較文学研究の実践でもあったと位置づける。評者は以上の内容に対し、厳密な論証を高く評価しつつ、本書が用いるナショナリズム概念を日本人側のみならず、台湾人側に拡張することでより一貫した分析が可能ではないかと提起した。</p>	
6/7	<p>場所：早稲田大学現代政治経済研究所会議室（早稲田大学早稲田キャンパス1号館2階）</p> <p>著者：和泉司（慶應義塾大学）</p> <p>評者：河原功（東京大学）</p> <p>報告タイトル：『日本統治期台湾と帝国の「文壇」』著者との対話</p> <p>参加人数：13名</p> <p>活動報告：本報告では和泉司の『日本統治期台湾と帝国の〈文壇〉』について扱われた。著者は民族意識の顕現としての〈日本文学〉という分析手法に対する問題意識を背景に、テキスト分析を中心に、〈帝国〉の中における〈台湾文壇〉の相対化と絶対化の併走状態を考慮することを試みている。その際、〈台湾文壇〉と〈中央文壇〉をつなげるものとして、〈文学懸賞〉が取り上げられている。本書は二部構成になっており、第一部「憧れの〈中央文壇〉—回路としての〈文学懸賞〉」では、主に千九三十年代の台湾人作家志望者の文学活動が扱われている。一方、第二部「〈自立〉を模索する〈台湾文壇〉—〈中央〉との接続/切断」では主に千九四十年代前半（日本統治期）の台湾文壇形成はその内部での対立・競争がどの</p>	

6/14	<p>ような形で現れ、テキストにどのような影響を与えているかを念頭に分析が行われている。評者は、作家や作品を中心に論じられることが多かった台湾文学論にあって、〈中央文壇〉をどう意識し、コミットしたかを明らかにするために、〈文学懸賞〉に目をつけて論を展開したのは本書が初めてであり、台湾文学を理解するよき研究書であると評価している。</p> <p>場所：早稲田大学早稲田キャンパス 22 号館 502 教室 報告者：川上桃子氏（アジア経済研究所） コメンテーター：山田賢一氏（NHK 放送文化研究所） 報告タイトル：台湾マスメディアにおける中国の影響力の浸透メカニズム 参加人数：29 名 活動報告： 台湾のマスメディアにおいて、「中国ファクター」が強まっている。「中国ファクター」とは、1990年代半ばに始まり、2008年以降に特に顕在化した「中国の経済・政治面での交流が台湾の民主主義に及ぼす負の影響」と定義しうる。近年の台湾マスメディアにみる中国の影響力の強まりは、①中国で事業を展開する企業家らによるマスメディアの買収と、その報道・言論内容への直接・間接の介入、②テレビ曲によるコンテンツの対中輸出、中国との事業提携に伴う、対中配慮の強まり、③中国とメディア企業幹部の直接的な「コミュニケーション」の日常化、④中国の各級政府による報道内容の買い付け、報道を装った宣伝、⑤広告出稿などに具体的に現れている。オーナーの強い影響力のもと、新聞社においては日々の紙面作りを担う編集長や社説執筆の責任者である総主筆、テレビにおいては経理級の幹部が意思決定者(gatekeeper)を通じて、これらの報道・言論を生産している。強い影響力の背後には、拡大する中国の内需市場の存在と、そこでの利益半分をコントロールしている中国政府の存在がある。このようなマスメディアにおける中国の影響力の浸透は、中国に関する報道・言論空間にゆがみを生じさせるようになっている。</p>
6/21	<p>場所：早稲田大学現代政治経済研究所会議室（早稲田大学早稲田キャンパス 1 号館 2 階） 著者：平川幸子（早稲田大学） 評者：清水麗（桐蔭横浜大学） 報告タイトル：『「二つの中国」と日本方式 外交ジレンマ解決の起源と応用』著者との対話 参加人数：17 名 活動報告： 本研究は、「日本方式」を、法と慣習からなる規範・制度としてモデル化する作業を行うと同時に、その起源と各国への応用プロセスを歴史資料から解析するものである。冷戦時代に生じた中国分裂問題は、国際社会に事実として存在する「二つの中国」と正式な関係を同時には持てない、というジレンマをもたらした。このジレンマを解決する手段として各国が採用したのが「日本方式」であった。「日本方式」とは、「一つの中国」として承認した政府との正式な関係に加えて、承認しない政府とも経済社会・実務面での実質的關係を構築する外交枠組みであり、問題解決方式と定義される。これにより、国家が、政府と民間という二つのレベルのアクターを柔軟に管理することで、中国とも台湾とも良好な関係を維持することができた。この解決方法はその名が示す通り、1970年代の、台湾との断交という国際社会</p>

	<p>の大きな流れの中で、最初に日中・日台関係で生まれた。その後、オーストラリア、マレーシア、フィリピン、タイなどのアジア太平洋諸国が同様の方式を採用し、米中国交正常化よりも早く中国との国交正常化を達成することができた。</p>
7/12	<p>日時：2013年7月12日（金） 18:20～20:30 場所：早稲田大学早稲田キャンパス 22号館 502教室 報告者：春山明哲（早稲田大学） コメンテーター：何義麟（台北教育大学） 報告タイトル：日本における台湾史研究の100年 序論 参加人数：36名 活動報告： 日本における台湾史研究は、東アジア全体の近現代史を総体的・体系的に理解する上で、また戒厳令下の台湾で学術的活動の自由が制限されていたという意味で、重要である。『台湾史研究のための近代日本の基礎知識』（仮称）の刊行を目標に到達するために、これまでの台湾史研究／近代日本研究のレビューが必要であり、その方法として報告者らは「書誌学的方法」を試みている。「書誌学的方法」とは、主として「その書物がどのように成立したのか」という視点から、学問・知識／「学知」／その系譜などを検討する方法のことである。ここでの100年とは1895年から1990年を指し、本報告では三つの時期と問題、すなわち（1）戦前期、植民地台湾における「学知」の成立の問題、（2）戦後日本における、台湾人「留学生」による台湾史研究の問題、（3）「台湾近現代史研究会」を媒介とした台湾人研究者の問題がとりあげられた。植民地台湾における「学知」を考える上で重要な人物として、後藤新平・岡松参太郎・新渡戸稻造・矢内原忠雄・伊能嘉矩などがあり、一方、日本において台湾史を研究した台湾人「留学生」として、王育徳・黄昭堂・許世楷・江丙坤・涂照彦・劉進慶・戴国輝などがいる。</p>
10/4	<p>場所：早稲田大学早稲田キャンパス 1号館 2階 報告者：湊照宏（大阪産業大学） 司会：春山明哲（早稲田大学） 報告タイトル：台湾史研究の回顧と展望(2)：経済史 参加人数：18名 活動報告： 本報告は、主に1990年代以降の日本における台湾経済史研究を振り返り、問題意識の変遷を考察するとともに、各個別研究の研究史における位置づけを図ることを目的としている。台湾経済史の代表的な著作として、矢内原忠雄の『帝国主義下の台湾』があり、これを超える水準の研究として現れたのが涂照彦の『日本帝国主義下の台湾』である。この涂照彦の研究はしばらく研究水準であり続け、1990年代以降における台湾経済史研究は、同書を乗り越えようとする若手研究者を中心になされた。冷戦の終結にともなう社会主義体制の動揺によるマルクス経済学の退潮やアジアNIEsの経済成長を背景として、日本独占資本による台湾人に対する搾取や収奪といった論調は後景に退き、戦後台湾の経済成長につながるような内発的成長要因の探求、戦後台湾の工業化に寄与した近代的諸制度やインフラストラクチャの分析、また、戦前と戦後をまたいだ産業史研究</p>

	<p>が多くなっていった。しかし、金融と労働の分野はほとんど進展を見なかった。今後は、理論と実証の両方を意識した定量的かつ定性的な分析、および工業部門と農業部門との連関を意識しそれぞれの相対的比重をふまえたうえでの分析が必要となってくる。</p>
11/22	<p>場所：早稲田大学早稲田キャンパス 1 号館 2 階 報告者：宇治郷毅氏（元国会図書館副館長、元同志社大学教授） 司会：春山明哲（早稲田大学） 報告タイトル：「石坂荘作の教育事業をめぐって」 参加人数：13 名 活動報告： 本報告では、日本植民地統治期における石坂荘作の業績を、教育事業を中心として再評価をする試みが行われた。石坂は「忘れられた先駆的教育家」として位置づけられる。戦前においては、石坂についてのまとまった評伝あるいは研究書はなく、学界からは終止無視された。また戦後も、台湾でも日本でも長く忘れられた存在になっていた。しかし、1990年代以降の台湾における「民主化」「台湾化」の流れの中で、詳細な郷土史研究や日本統治期研究が可能となり、石坂の人格や業績を評価する研究が現れ始めた。とりわけ、基隆士では郷土に貢献した「民間教育家」として日本人として唯一評価され、市刊行物に公式に取りあげられる存在となっている。石坂は地方経済・産業分野、地方行政及び公益事業分野などでも業績を残しているが、とりわけ教育事業における業績は注目に値する。公立学校制度から排除された勤労青少年への教育を担った「基隆夜学校」、地方女子教育に貢献し、教育に近代性も認められる「基隆家政女学校」、台湾最初の近代図書館である「石坂文庫」などがその例である。もちろん、近代化・日本化・格差化の面から見て、教育事業の限界性も指摘できるが、他方でその進歩性には評価できる点が多い。報告者は石坂を、台湾の民衆に寄り添い、台湾から得たものは台湾に返した日本人であったと評価している。</p>
12/6	<p>場所：早稲田大学早稲田キャンパス 22 号館 502 教室 報告者：笠原政治氏（横浜国立大学名誉教授） 司会：春山明哲（早稲田大学） 報告タイトル：シリーズ：台湾史研究の回顧と展望(3)：「日本における台湾原住民族研究の回顧と展望」 参加人数：21 名 活動報告： 台湾の原住民族は、第二次大戦前に、日本の人類学フィールドに基づく研究が最も早くから、最も活発に行われた民族の一つである。戦前の調査研究は、領台初期における伊能嘉矩・鳥居龍蔵・森丑之助などの「学術探検期」、1909年前後の臨時台湾旧慣調査会の時期、空白時期を挟んで1928年以降の大学などの専門家による調査の時期に分けられる。このように、戦前の原住民族研究は活発なものであったが、旧慣を探る「伝統志向」の研究が主流であったこと、および1930年以降の変化の様相を主題にした研究がきわめて乏しいことなどの点は注意が要する。戦後は、1990年頃までは日本人研究者の数は増えず、また「伝統志向」の人類学が伝統だった。ところが、1980年代終盤の戒厳令の解</p>

	<p>除や民主化の進展によって状況が大きく変わった。台湾全体で原住民族に対する理解が深まり、そうした変化は日本の研究状況にも波及した。日本統治時代の記録・研究は新しい時代の文脈に置かれ始め、第二次大戦前からの研究の伝統を引く日本の研究者は、フィールドワークによる研究に加えて、「研究史の研究」が不可欠の課題になった。今後の展望にかえて、報告者は、通婚によって子・孫の世代でアイデンティティのあり方が変化していることを指摘した。また、台湾と日本の関係を越えた学術研究の広がりをもどのように確保していくのかについても、検討すべきだとしている。</p>
12/20	<p>場所：早稲田大学早稲田キャンパス 1 号館 2 階 報告者：菅野敦志氏（名桜大学） 司会：春山明哲（早稲田大学） 報告タイトル：シリーズ：台湾史研究の回顧と展望(4) 教育史 参加人数：21 名 活動報告： 本報告の目的は、台湾史の中でも教育史をレビューし、その上で今後の研究の方向性を探ることである。台湾教育史は通中「戦前」と「戦後」に大別されるが、台湾が植民地であったという特殊性ゆえに、戦前は「植民地統治期」の日本教育史、戦後は「中華民国期」の外国教育史として位置づけられる。そのため、日本においては、一般的にも学術的にも、その関心はおのずと1945年までに止まるものであり続けた。この研究面での断絶が生じてきたという点は大きなポイントである。台湾の教育史は、制度的枠組みを研究し、支配と被支配の構造を明らかにするところから出発したが、次第に様々な主体の思考や行動に対する関心へと焦点が移っていった。この「制度から人」への転換には、研究者個人の努力の他に、外的要因として民主化後の政治的変化による隣人台湾の変化が挙げられる。隣人による問題的に触発される形で、日本植民地研究に対する新たな研究の視座が「第三世代」によって提示されたこと、そしてそのような視座から台湾を研究する新世代の研究者が登場していったことの意義は大きい。このような視座からの研究は、「研究史研究によって、結局、教育とは何かということが明らかになる」という普遍的な問いが、過去の歴史が現在だけではなく未来にも開かれるという対話の可能性を示唆している。</p>
1/31	<p>場所：早稲田大学早稲田キャンパス 1 号館 2 階 報告者：浅野豊美氏（中京大学国際教養学部教授） 司会：春山明哲（早稲田大学） 報告タイトル：シリーズ：台湾史研究の回顧と展望(5) 政治史・法制史 参加人数：25 名 活動報告： 本報告は台湾史研究の中でも、政治史と法制史を振り返るものである。政治史と法制史の分野では、枠組みを意識しない実証する研究スタイルと、枠組みを追究・意識した研究スタイルがあるが、この両極端にほとんどの研究が存在している。報告者によれば、過去に漂っている未知のものに肉薄する実証研究とそれを土台にした大胆な枠組みが必要である。また、ナショナリズム史観・国民国家の成功失敗物語を超える模索がなさ</p>

<p>3/15</p> <p>3/20</p>	<p>れなければならない。具体的な研究テーマ・視点としては、地方政治史や植民地官僚史といった個人を前提とした政治史、原住民族社会の慣習と村落変容などの共同体の把握とそれをめぐる政治、帝国としての一体的な資本主義や東アジア資本主義といったマクロの政治経済史的視点、中間団体や関係・法に着目する戦後の連続という視点、周辺地域との接続をさぐる国際関係の中の帝国史という視点などがある。報告の最後には、国民意識の誕生、展開、衰退の雁行形的発展やもつれ合いも問うべきであるといった問題が提起された。</p> <p>場所：早稲田大学 現代政治経済研究所会議室（早稲田キャンパス 1 号館 2 階） 報告者：四方田 犬彦（京都造形芸術大学大学院客員研究員） 報告タイトル：台湾における日本映画の影響</p> <p>場所：早稲田大学 現代政治経済研究所会議室（早稲田キャンパス 1 号館 2 階） 第一部 報告者：坂井 博美（東京女学館大学・非常勤講師）・繁田真爾（明星学園・教諭） テーマ：「愛の争闘」のジェンダー力学：岩野清と泡鳴の同棲・訴訟・思想</p> <p>第二部 報告者：石田 徹（島根県立大学・助手）・澤井啓一（恵泉女子大学・名誉教授） テーマ：近代移行期の日朝関係——国交刷新をめぐる日朝双方の論理——</p>
<p>来年度の 活動計画</p>	<p>研究会の継続的開催（月一回をめぐりにテーマを設定し行う）。 東アジアの歴史的和解に関する研究書の出版にむけた計画。 東アジアの社会運動の関する研究活動の組織化。</p>
<p>終了の場合</p>	<p>研究成果刊行の時期： 年 月（予定） 研究成果の公開方法：</p>